□ 作品紹介 □

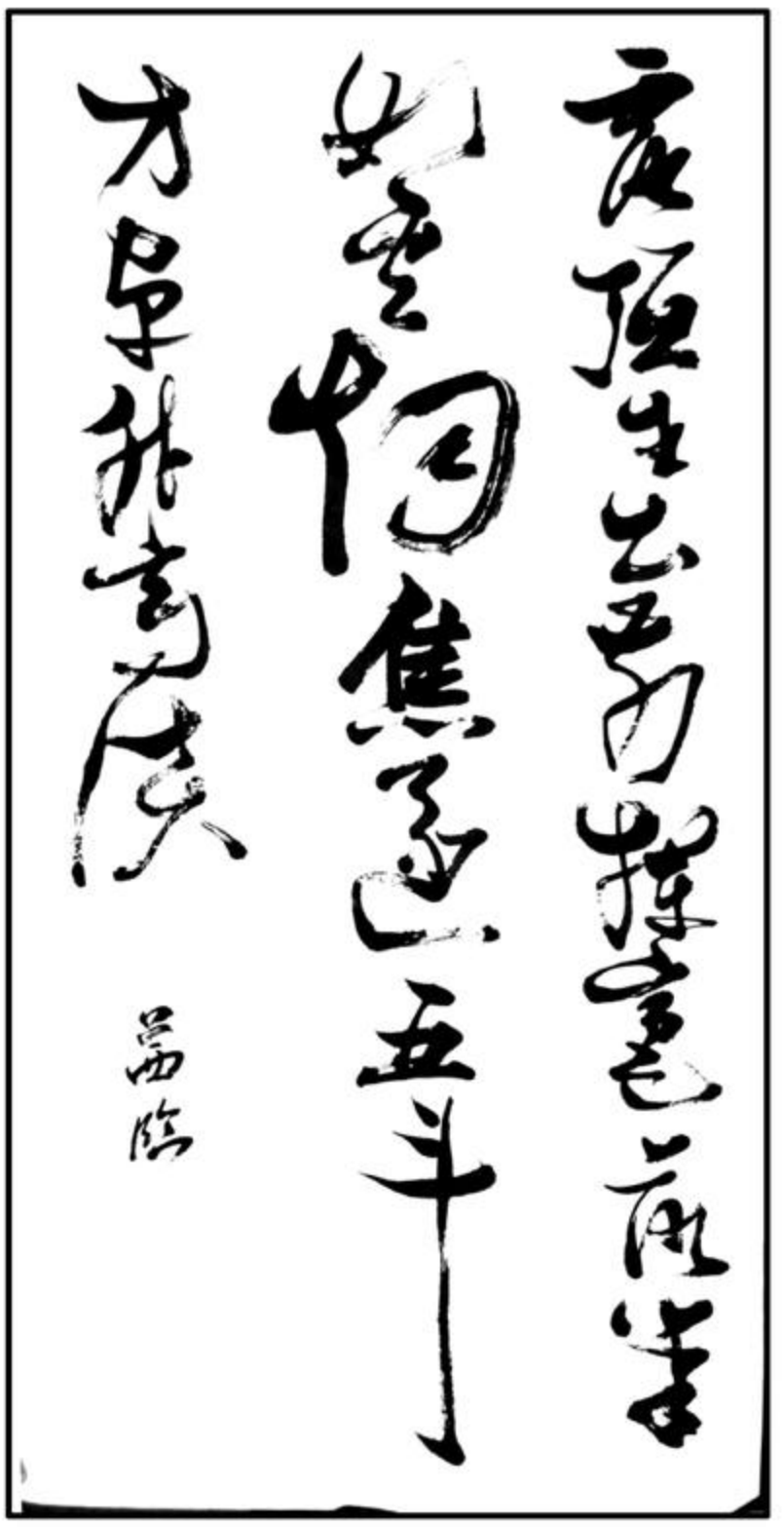
一、糸井健太
臨書　楷書　『美人董氏墓誌銘』　半切
「美人姓董汴州恤冝縣也祖佛子齊涼刹」
大変よく整った字形と、いきなり「美人」で始まるその不敵さにおもしろさを感じたので、この墓誌銘を選びました（美人は古代中国の官名です）。稚拙な点は未だ多いですが、多くの方から御指導をいただき仕上げることができました。



二、中川真理子
臨書　行書　橘逸勢『伊都内親王願文釋文』　半切
「端形昇物表慈舟蹙汎倶出愛河慧柯一」
力強い筆遣いながら、まとまりのある逸勢の書に一目惚れして書きました。実際書いてみると想像以上に難しくて逸勢の書にはなかなか近づけませんでしたが、見ていて書いていてこんなに楽しい書は初めてでした。いつも新たな発見のあるこの書にまた挑戦したいです。



三、高垣茜
臨書　草書　張瑞図『杜甫飲中八仙歌巻』　全紙
「露頂王公前揮毫落筆如雲煙焦遂五斗方卓然高談」
張瑞図らしさをもっと表現できるようになりたい！ということで今回も瑞図に挑戦しました。試行錯誤しつつ、できるかぎり書き込んだ結果こうなりました。前回より成長できてたら嬉しいです。



四、木谷亮太
臨書　行書　王羲之『集字聖教序』　半切
「不惑形潜莫覩在智猶迷況乎佛道」
舐めてかかって大怪我しました。



五、西村有希子
臨書　楷書　虞世南『孔子廟堂碑』　半切
「夫子膺五緯之精踵千年之聖固天」
孔子廟堂碑の優雅な雰囲気の表現を目指しました。まだまだ未熟な作品ですが、御批評お願いします。



六、尾崎由布子
創作　隷書　『杜甫の詩』　全紙
「蛟龍窟宅尊」（蛟龍が窟宅、尊し）
今回は、全紙の創作を初めて五字でしました。字数が少ないために全体に白い部分が多くなりがちだったのですが、それを修正しようとすると、全部の線が太くなり、作品の雰囲気が重たくなってしまうのに苦労しました。



七、頓部李歩子
創作　仮名　『あきかぜ』　半紙
「あきかぜのふきにしひよりひさかたのあまのかはらにたたぬひはなし」
入学当初に比べるとかなり上達したと思います。書道部では心身ともに成長できました。
書道部の皆様，ほんとうにありがとうございます！　そして道を教えて下さった師匠，ありがとうございます。これからも心の支えとして書道を続けていきたいです。



八、横山成基
臨書　楷書　褚遂良『楷書千字文』　半切四聯
「孝當竭力忠則盡命臨深履薄夙興温清／似蘭斯馨如松之盛川流不息淵澄取暎／容止若思言辞安定篤初誠美慎終宜令／榮業所基籍甚無竟學優登仕撮職」
初夏書展と同じく、褚遂良の楷書千字文に挑戦しました。完成度は極めて低いですが、よろしければご批評をお願い致します。


孝當竭力忠則盡命
臨深履薄夙風興温清


似蘭斯馨如松之盛
川流不息淵澄取映


容止若思言辞安定
篤初誠美慎終宜令


榮業所基籍甚無竟
學優登仕攝職

成基昭

九、水谷慈

臨書　隷書　楊揆　『礼器碑』　半切

「青龍在沚歎霜月之霊皇極之日魯相」

正統派の隷書。綺麗な字形に惹かれました。特に最初の二文字、「青」と「龍」がお気に入りです。少し単調な作品になってしまったようにも感じますが、優しく整った雰囲気を大切にしてみました。


青龍在沚歎霜月之
靈皇極之日魯相

慈昭

一〇、柳澤杏衣

臨書　楷書　顔真卿『多宝塔碑』　半切

「佛有妙法比象蓮華圓頓深入眞淨無瑕慧通法界福利恒沙直至寶所俱乘大車」

いきなり三行は私には荷が重すぎました。しかし出来はどうあれ、寝食・勉学を忘れるくらい楽しかったです。多宝塔、書けば書くほど好きになる——。もっと頑張りますので、これからよろしくお願いします。


佛有妙法比象蓮華圓頓深入
真淨無瑕慧通法界福利恒沙
直至寶所俱乘大車

杏衣臨

一一、和田卓也

臨書　篆書　呉熙載『篆書崔子玉座右銘四屏』　全紙

「崔子玉坐右銘毋道人之短毋説己之長施人愼勿念受施愼勿忘世譽不足慕惟仁爲紀綱隠心而後動謗議庸何傷毋使名過實守愚聖所臧」

忘れもしない初めて書き上げたときの作品の「気持ち悪さ」。混沌には秩序が必要というわけで、「幾何学性」をキーワードに整然とした作品を目指しました。枠にはめたら形になるやろという目論みとは裏腹に、いかにして人を魅せる作品をつくるかという恐ろしい問題に直面させられた制作となりました。



一二、松永智子

創作　調和体　『しののめ』

「東雲のよるの海にて汽笛鳴る心よ起きよ目を覚ませ」（中原中也『童謡』より）

中也のやさしい言葉からは、闇を射る光の世界が感じられます。作品制作中のBGMはシベリウス交響曲第二番。視覚的、聴覚的に広がる海の情景と、夜明けのような希望を伝えられたら幸いです。

半切



一三、江崎洋平

臨書　行書　董其昌『邠風図詩巻』　二尺×八尺

「邠風親灑宸章賦閔農田家作苦非一状深耕薄穫何営々犁頭風雨生綃幅餘音散入春棻曲但識宮中錦」

十月も半ばになろうかという頃になって初めて書き始めた作品です。しかし、妥協はしたくないと思い、試行錯誤をしながらも完成させました。改めて董其昌の書に魅了されました。



一四、中川和也

臨書　楷書　光明皇后『楽毅論』　全紙

「属之華裔我澤如春下應如草道光宇宙賢者託心鄰国傾慕四海延頸思載燕主仰望風聲二城」

線のうねり。これこそがまさに「光明皇后、楽毅論」の醍醐味。元々は王羲之の楽毅論を光明皇后が臨書したものでありながら、もはや両者は別の作品であろうと思います。線の抑揚、独特のリズム感。光明皇后の名蹟を再現できるように努めました。ご意見・ご批評をお願いします。



一五、池田亜由美

臨書　行書　王羲之『興福寺断碑』

「自石楼東鎮守封司地之班金冊西」

行書に初挑戦しました。たくさんの人にアドバイスをいただき、なんとか出品する事ができました。まだまだ未熟な作品ですが、御批評よろしくお願いします。



一六、鈴木詩織

創作　仮名　『月みれば』　半紙

「月みれはちゝにものこそかなしけれわかみひとつの秋にはあらねと」

初めて創作に挑戦してみました。百人一首の大江千里の歌です。構成に面白味を出したくて試行錯誤しましたが、多少纏まりを欠いた感があるかも知れません。至らない部分は多いですが今の自分としては精一杯の作品になったかと思います。

一七、西眞庸夏

臨書　楷書　楮遂良『雁塔聖教序』　半切

「以其無形也故知象顯可徴雖愚不惑」

今回、軽快な筆使いをしてみたいということで、この作品を書くことにしました。筆の弾力を生かすのに苦労しましたが、楽しく作品制作に取り組めました。





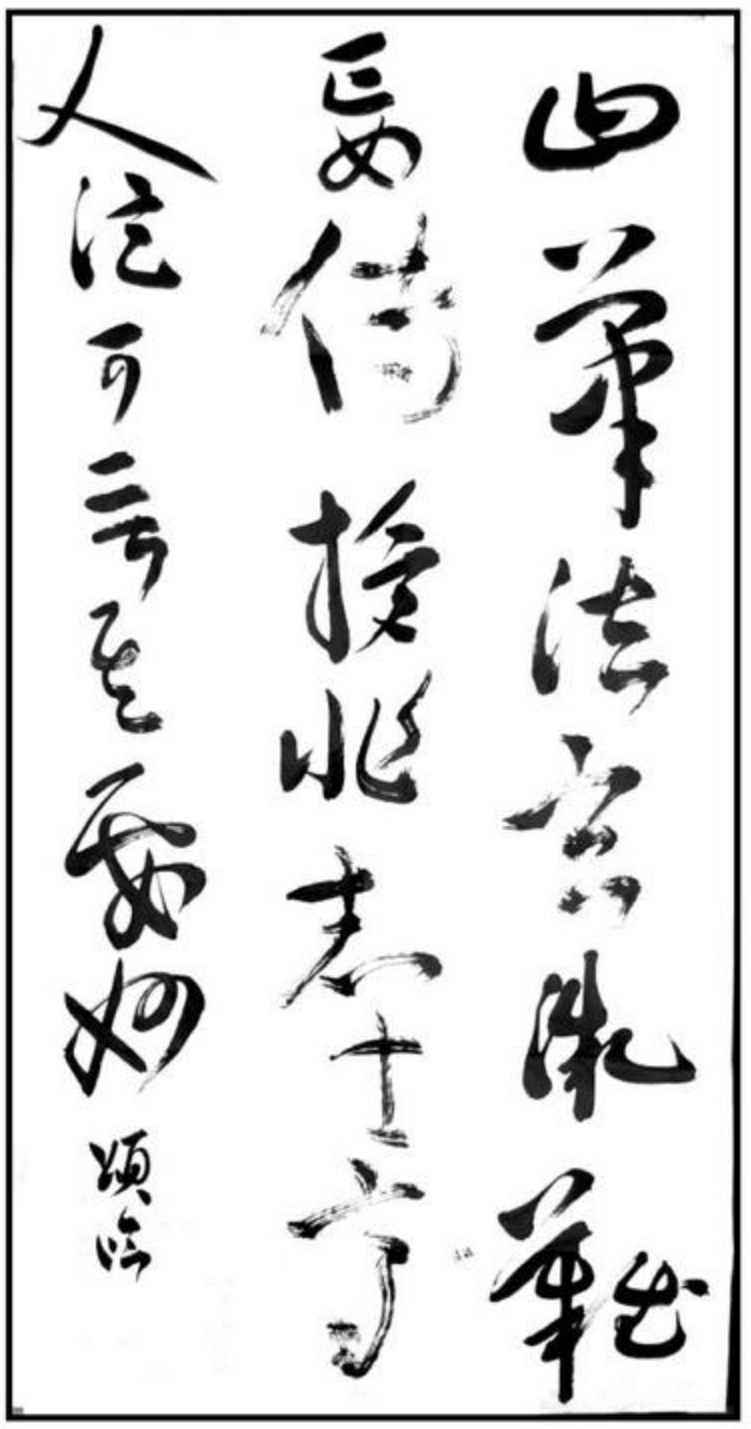
一八、窪田頌

臨書　草書　康里巎巎『述筆法』　全紙

「曰筆法玄微難妄伝授非志士高人詎可言其要妙」

趙孟頫と並ぶ元代の書家・康里巎巎の『述筆法』を書いてみました。名前から明らかなように、彼は漢族出身ではなく、トルコ系康里部の出身でした。本名は Kiki,Käkä と言ったそうです。元代の国際的な側面が出ていて面白い、と思ったのが興味の始めでした。

そんな興味本位だったのですが、書き始めると改めてそのウイグル文字的な払いの綺麗さ（彼はウイグル文字の名手でもあったという）に魅せられました。それゆえ、最も払いが綺麗に出る部分を書いたつもりです。払いを上手く出来た自信はありませんが、批評を頂けると有難いです。



一九、渡部美紗　　半切

臨書　行草書　傅山『行草五言古詩巻』
「麟郎之誕自有子卿春容之章」

行草書に初めて挑戦しました。墨の濃淡や文字の大小など、バランスに気をつけました。もっともっと練習して素敵な作品を作りたいと思います。気付いたこと等ありましたらご指摘いただければ幸いです。

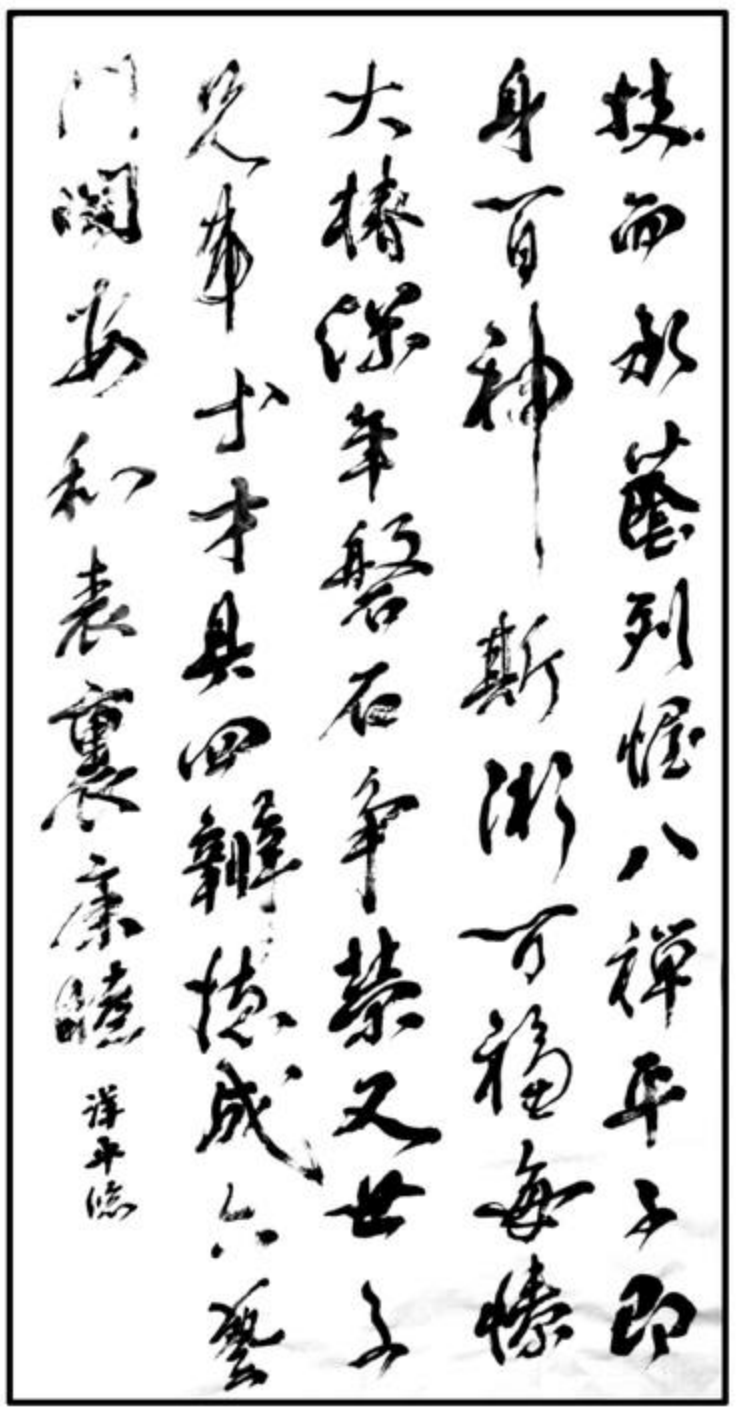


二〇、水谷慈・江崎洋平　　全紙二聯

臨書　行書　橘逸勢『伊都内親王願文』
「十六町餘荘一處畠一町謹充香燈轉讀料以茲景業追福考妣ニ親先亡以敬瀕灑六塵揮捐九結咀覺藥八調滋栖粮ニ慧攬定／枝而承蔭列幄八禪平子即身百神斯漸万福毎臻大椿保年盤石爭榮。又世子兄弟等才具四辨徳成六藝門閤安和」

合作です。江崎くんには多大なるご迷惑を…。配字の仕方や線質など、同じ法帖を臨書しても、個性が出てしまうことを実感しました。別々の作品でも、単なる二聯でもなく、「合作」として一つにまとめることができたでしょうか。（水谷）

三筆のなかで、初夏書展になかった逸勢を合作しようと決めたのは六月のことでした。しかし、互いになかなか合わす機会がなく、いままでで一番の難産でした。初夏の空海も含め、いろんな意味で三筆に圧倒されっぱなしでした。（江崎）



二二、岡田卓也
臨書　楷書　欧陽詢『九成宮醴泉銘』　半切
「弊炎暑群下請建離宮庶可怡神養」
臨書作品として初めて出品しました。臨書は原本に対し、謙虚に忠実に向き合い表現するのですが、自分はすぐ自己流が出てしまい難儀しました。ご批評お願いします。



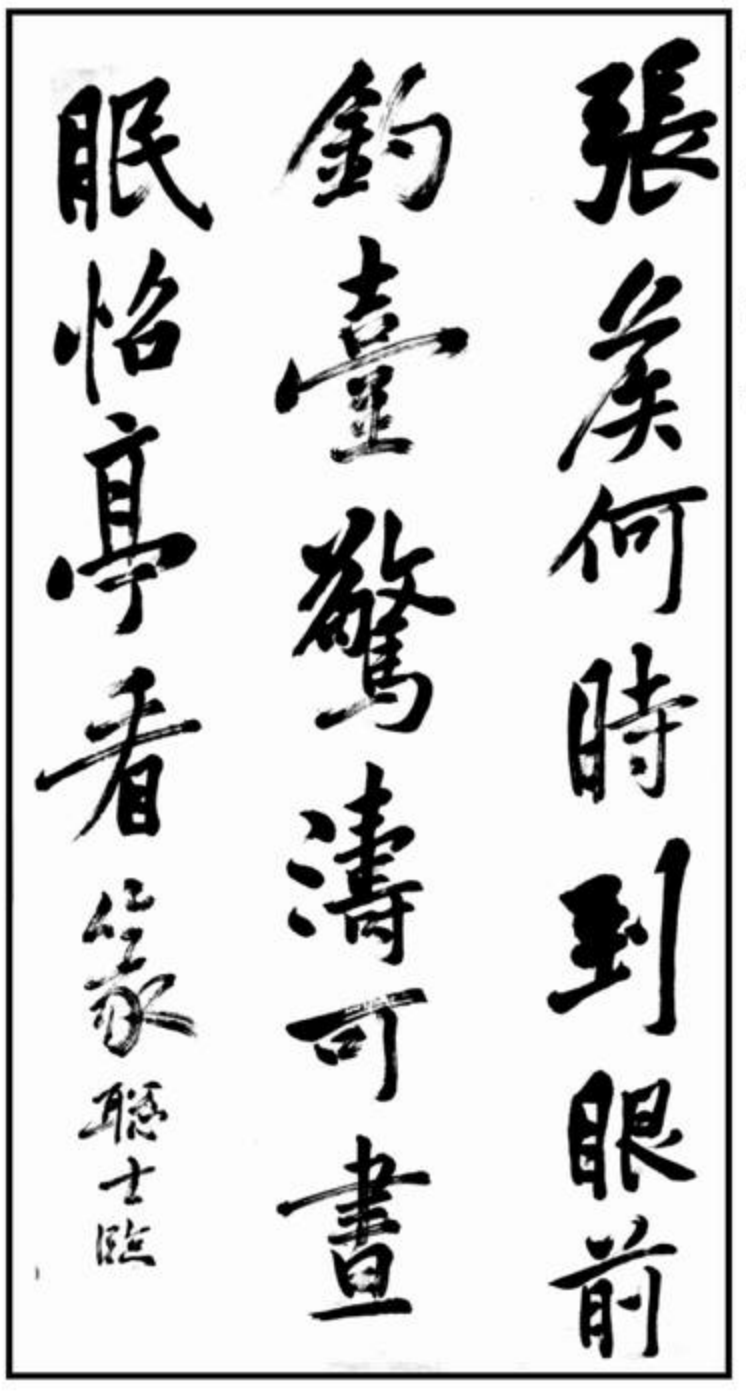
二三、松永智子
臨書　行書　董其昌『白居易琵琶行』　半切
「夜坐彈一曲為君翻作琵琶行感我此意」
遠ざかっていた董其昌をもう一度きちんと勉強しようという反省半分、新築した祖母宅の和室に似合う作品をというひらめき半分で取り組みました。白楽天の「君が為に翻して琵琶行を作らん」の漢詩よろしく、「祖母のため勉励して琵琶行を書かん」の私。表現の幅を広げるべく、修業はまだまだ続きます。



二四、岡本清二
臨書　楷書　虞世南『孔子廟堂碑』　半切
「至仁於蔵用祖述先聖憲章住哲夫其道也」
温雅で品格の高いという楷書に挑戦してみました。が、かえって経験の浅さを露呈することになってしまいました。これからも精進していきたいです。



二五、永溝聡士
臨書　行書　黄堅庭『松風閣』　全紙
「張侯何時到眼前　釣台驚涛可昼眠怡亭看篆」
初めての出品です。ダイナミックな感じが気に入って書いてみました。かすれが上手くいかずに苦労しましたが、広い心で見てください。

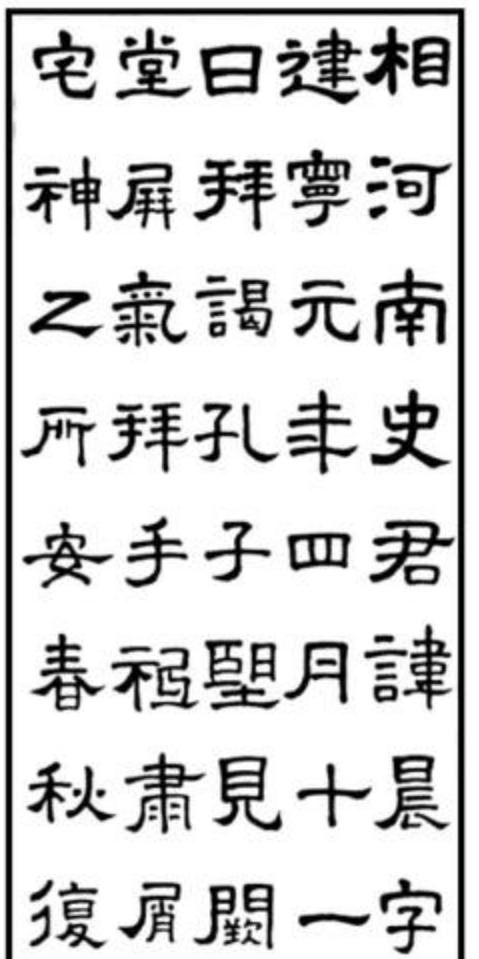


二五、和田卓也

臨書　隷書『史晨後碑』　二尺×八尺

「相河南史君諱晨字伯時従越騎校尉拝建寧元年四月十一日戊子致官乃以令日拝謁孔子望見闕觀式路虔踞既至升堂屏氣拝手祗粛屑優髣髴若在依依舊宅神之所安春秋復禮稽度玄靈」

友曰く「古拙」な作品。「アルカイック」と呼ばれた方が心地良い響きなのでそちらでお願いします。「質より量」の精神で粘りましたが、「量から生まれる質」の域に至らなかったのは無念なところ。努力賞や敢闘賞を狙っているのは秘密です。御批評よろしくお願い申し上げます。



二六、上原達也　行書　『曹操「短歌行」』　二尺×八尺

「對酒當歌　人生幾何　譬如朝露　去日苦多　慨當以慷　幽思難忘　何以解憂　唯有杜康」

（酒に対して當に歌うべし、人生幾何ぞ。譬えば朝露の如し、去る日は苦だ多し。慨して當に以て慷すべし、幽思忘れ難し。何を以てか憂いを解かん、唯だ杜康有るのみ。）

「治世の能臣、乱世の奸雄」と評された、三国志は魏の英雄、曹操の詩の冒頭部分です。

この作品は、来年より東京で社会人となる私にとって、十年以上続いた書道人生における一先ずのピリオドとなります。

書は人なりと言いますが、書の成長に伴う自分自身の成長も紙の内に込められたらと思い、筆を執りました。

自分は書と共に如何程成長できたのか。どうぞご堪能下さい。



二七、白田全弘

創作　篆書　『玄黙』　全紙

「玄黙」

玄黙……もの静かにたたずみ、奥ゆかしい様子という意味の言葉です。

書展に出品するのは今回で最後となりましたが、これからも、書と向き合える時間を大切にしていきたいと思います。



二八、春木光平

臨書　行書　王鐸『行書五律五首巻』　二尺×八尺

「去頻延佇鐘聲出隠微上沐磵寺後峪柬史楊諸君子忘此羣生動禽言亦覺紛屢窺深谷色高臥太濛雲百藥吹香路一身」

少し背伸びをしてみました。原本が横作品でありながら、縦作品としてまとめたいという思いがあり字形や字の向きを変えて挑戦しました。臨書作品というより創作作品のように感じます。筆遣いなど未熟な点が多いので、ご批評よろしくお願いします。





二九、窪田頌

創作　篆書　二尺×八尺

『士燮逐士匄(范匄)』

「范匄趨進曰疏行首晉楚唯天所授何患焉文子執戈逐之曰國之存亡天也童子何知焉」

(范匄、趨り進みて曰く、行首を疏かん。晉楚、唯天の授くる所なり。何ぞ患えん、と。文子、戈を執りて之を逐いて曰く、國の存亡、天なり。童子、何をか知らんや、と。)

春秋左氏伝の逸話より。士匄(范匄)は要らぬ進言をし、結果としてほこ・・を持った父の士燮(文子)に逐われることになる。さして詳しくもないのに、勝手に意見を作って、ズケズケと言ってしまう。私はいつもそんなものなのですが、決して良いことではない。それこそ「童子、何をか知らんや！」大した考えがあるはずもないのだから、容易に自分の考えをひけらかすべきではない。

そんな自戒を込めて、呪力を持つ篆文で書いてみました。ですが上手くまとまっていないし、果たして呪力があるのかどうか……

三〇、水谷慈

臨書　行書　何紹基『詠馬詩』　二尺×八尺

「遮山白雨飛珠亂入船巻地風來忽吹散望湖棲下水如天放生魚鼈逐人來無主荷花到處開水枕能令山俛仰風船解與月徘徊獻花」

初夏書展に引き続き、何紹基さん。これは恋？ってくらい好きです(笑)初挑戦の二八の大きさに振り回されていますが、楽しく書かせてもらいました。…両想いかもしれない(笑)



三一、中川和也　　創作　無体（前衛書）　半切二分の一

「断雲」

千切れ雲が蒼天に悠然と浮かんでいる…いかにこの情景を書として紙上に表現させるか。それが最大の課題。果たして克服できているでしょうか。皆さんが各人の感性に従って「感じて」いただきたいと思います。



三二、木谷亮太　　臨書　草書　王羲之『十七帖』　全紙

「母氏従妹平安故在永興居去此七十也吾在官諸理極」

初めて使う筆、初めての全紙、初めて書いた草書作品。色々と初挑戦してみました。



三三、籠碧　　臨書　楷書　趙孟頫『玄妙観重修三門記』　半切

「天地闔闢運乎鴻枢而乾坤為之戸」

右も左もわからぬまま法帖集を漁り、堂々としてのびやかな字に惹かれて、まずは趙孟頫を臨書することに決めました。ひと夏この偉大な書家に付き合って、これが二作品目です。どうも百年早かったようです。



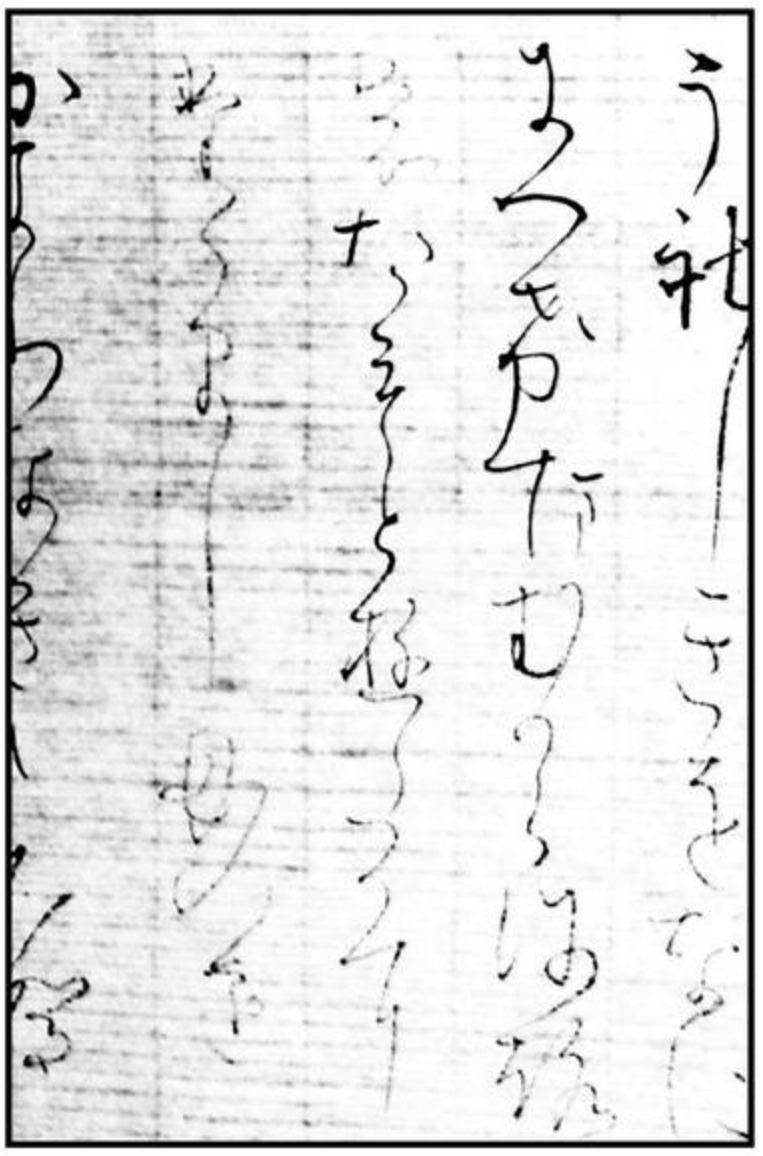
三四、舛井千草

臨書　仮名　伝藤原行成『曼殊院本古今集』

15×330cm

「わがうへに露ぞおくなるあまの川とわたるふねのかいのしづくか……(以下略)」

長かった……。藤原行成への想いが長じて、全臨に挑戦してみたのですが、さすがに三十一首は大変でした。気に入らない部分も多々あるのですが、やりきった感で満足してます。



三五、岡田卓也

創作　楷書　『風吹不動天邊月』

「風吹不動天邊月」（風吹けども動ぜず天邊の月）

風が吹けば地上の塵芥は飛び、草木は揺れ、雲すら形を変えて流れる。しかし、天上に輝く月は少しも動じず輝く。この文言はそんな月に確固たる信念や強い意志を喩えた禅語です。



半切

三六、上野敬峰

臨書　行書　趙孟頫『玄妙観重修三門記』

「玄妙之観賜額改矣廣殿新矣而三」

一字一字の面白さに加え、全体的な配字の均衡も豊かな法帖です。これを相手にするのは大変な労苦でしたが、その分、純粋な技術に加えて人としての精神的な豊かさをも問われているような、そんな迫力を感じられる作品に少しでも近づけられていたらなと思います。



半切

三七、林玄海

臨書　楷書　虞世南『孔子廟堂之碑』　半切

「三川削弱六國從衡鶩首兵利龍文鼎輕天垂伏鼇海躍長鯨」

今回も虞世南の作品に挑戦しました。まだこの人の作風をとらえきれず、線質もあまり良くないですが、自分なりに頑張ってみました。



三八、小川薫

臨書　行書　王羲之『二謝帖』　半切

「二謝面未比面遅詠良不……静羲之女愛」

大学に入ってから始めた書道、三作品目です。作品全体として迫力を出すこと・流れを出すことなど、書道の奥深さも徐々にわかってきました。まだまだ力不足ですが、御批評よろしくおねがいします。



三九、水谷慈

臨書　篆書　『郭店楚簡』　全紙

「弁利盗賊亡有絶偽弁詐民復孝慈三言以」

木簡です。臨書ですが、かなり遊んでしまいました。字を書いているというより、生き物を並べていく感覚で書きました。躍動感を出して、カオスな作品にしたいと思ったのですが、いかがでしょうか。



四〇、樫岡大輔

創作　調和体　『「神よ！」』　手ごろな大きさ

「ジーザス」

「エントロピーは増大するから」はあらゆる質問に答える理系の強力な切札だと個人的には思うが、「神」はそれ以上の究極の概念だ。何でも説明できるし。

最近信仰心の芽生えを感じないでもない。



✦　合作作品　✦

＊『行灯』

今年の秋季書展は１１月末の開催となりました。日暮れも早まり、冬の到来を実感する季節です。

そこで今回は、夕暮れの薄暗さを想定して「灯」を製作してみました。簡単なものですが、ゆったり眺めて楽しんでいただければ幸いです。

✦　賛助作品　✦

＊　講師　寺本蒼玄先生

創作

宋代の湯仲友の句を明末の傅山の書風で黄河の奔流の如く豪快に書き流した作品です。



This book was
made by the LeME